

がん・生殖医療における当院の患者支援

～専門チームの取り組みと今後の課題について～

IVF 大阪クリニック (1) IVF なんばクリニック (2)

金田 真紀 (1) 小松原 千暁 (1) 澤辺 麻衣子 (1) 下西 祥子 (1) 下園 真由美 (1)

福田 愛作 (1) 森本 義晴 (2)

【目的】

近年、がん治療の進歩により治療後の患者生存率が向上し、治療後のQOL向上の一つである妊孕性の温存が重要視されるようになってきた。

当院では、2013年よりがん患者の生殖医療について、医師と看護師、カウンセラーが専門チームを作り患者支援を行っている。今回、患者への支援方法について今後の課題と対策を検討したので報告する。

【対象および方法】

2013～2014年3月までチーム結成後にごん治療前の精子凍結または卵子・受精卵凍結を希望された患者を対象に、初診から凍結完了までの関わりについて症例毎にカンファレンスを実施した。カンファレンスでは、予約時の問診内容、初診当日の流れ、患者・家族の看護支援について検討した。

【結果】

がん治療前の、卵子凍結患者6名・精子凍結患者4名が受診された。予約専用の問診票を作成し慣れない生殖医療の施設の待ち時間短縮と、体調にも配慮出来る様に患者情報と患者の支援方法を受診前にチーム全体で共有することができた。初診当日は多くの生殖医療の情報提供をしなければならない為、看護師はチェックリストを作成し情報提供を実施した。診察日には出来る限り担当者が対応し、その日の状況報告と予定をチームで共有する事でタイムリーな問題点についても患者支援につなげる事が出来た。

【考察】

がんと診断された患者は、短期間にいくつもの選択を余儀なくされる。妊孕性温存を選択された場合にはがん治療と共に生殖医療についても向き合わなければならない。私たちはこの環境に置かれている患者を理解し、患者や家族が生殖医療についての不安を少しでも軽減出来るよう関わる事が重要である。その為には、正確な情報の提供とチームで患者のサポートが出来るように取り組む必要がある。

患者からがんの治療施設で生殖医療について相談しにくいといった現状もあり、がん治療施設との具体的な連携の対策も今後の課題としたい。